

李商隱疾病攷

中醫クリニック・コタカ 小高修司

李商隱の研究者として故高橋和巳を忘れることは出来ない。彼はこう言う。「詩の内に含まれる認識上の価値や詩人の体験的眞実を、詩の全体の結晶美を度外視して性急に摘出することは、あたかもピアノを壊して事務机として使う愚に等しい」(1)。とは云うものの、大望を抱きながら若年にして生を終わらざるを得なかった李商隱の疾病を考え、短命の理由をさぐることに意味は有ろう。

本題に入る前に彼の生涯を、上掲した高橋和巳の本より抜粋し概観しよう。

李商隱は美的存在と政治的存在の矛盾をもっとも鋭く生きた一人である。『旧唐書』が「才を待みて脆激、當塗者の薄^{うと}んずる所と為る」と書いて以来、彼の処世に関して、多くの先人の糾弾或いは弁護があるけれども、それら不知不識のうちに政治の側に立った毀誉とはまた別に、そこに人間のいまだ克服しえない本質的な矛盾の象徴をみてとる、もう一つ別な観点のあることを我々は知らなければならない (P.86)。彼の不運は、前後四十年にわたって牛李の党の対立角逐する時代に生きながら、党派を超えて信じあえる人間関係が存在しうると信じ込んでいた、或いは無理にそう思いこもうとした彼の思想のあり方から生まれた (p.87)。

不思議にその保護者に先立たれる李商隱はまた多くの知己にも先立たれ、やがて彼の心は灰よりも冷たくなってしまっていたと歎かれねばならなかった。自らの精神を開くべき友人との交歓にも恵まれなかった (p.83)。

三十六歳よりのちの後半生は、生臭い葛藤は交代し、かわって逆旅の歌、各地の歌枕、故事来歴におのれ的心情を託す詠史的作品に傾いていく。

1, 家族歴を考える

両親より受け継いだ根本的な生命力を「腎」というが故に、腎は「先天の本」とも称される。渉獵した限り李商隱の両親の死亡年齢について言及してあるものは見いだせなかった。そこで推論を行うしかないのだが、その前に李商隱自身の生年についての諸説を考える。元和八年説(馮浩『玉谿生年賦』)、元和六年説(錢震倫『玉谿生年賦訂誤』)そして元和七年説(張采田『玉谿生年賦會箋』)であるが、『李商隱伝論』(2)では、李商隱は元和七年初めに生まれ、斐氏姉は同年末に死亡と推論している。斐氏姉は彼らの父・李嗣が元和六年獲嘉県の県令に任ぜられた年に出嫁したものの、幸を

得られず一年間病に伏した後に翌七年末に亡くなったとされる。彼女は三姉妹の次女で、出嫁当時十九歳であった（3）とすれば、死亡時二十歳となる。当然両親の悲嘆は限りないものであったろう。『仲氏姊文状』に「烈考殿中君、知名不撓」の語があり、知名が「五十にして天命を知る」を指すとすれば、父・李嗣は斐氏姉死亡時にほぼ五十歳であったと考えられる。彼は長慶元年、商隠が十歳の時に亡くなっており、ほぼ六十歳で亡くなったと考えられよう。

さて母親であるが、斐氏姉の上に長女がいたとして、二十歳頃に初産とすると、李商隠誕生時には四十歳は越えていたと考えることに無理はない。会昌二年冬に李商隠が三十一歳の時に亡くなっており（4）、死亡年齢は七十歳を越えていたと考えられる。

このように両親は当時の平均余命から考えても、特に短命とは云えず「腎」が弱かったとは考えにくい。斐氏姉以外に李商隠の短命を示唆させる人がいるのであろうか。「請廬尚書撰曾祖妣志文状」に以下のようにある（5、6）。

安陽君（李商隠の曾祖父李叔恒を指す）…年二十九棄代、祔葬於懷州雍店之東原先大夫故美原令之佐次。…始夫人既孀（＝寡婦）、教邢州君（商隠の祖父李備を指す）以經業得録、寓居於營陽。不幸邢州君亦以疾早世（＝冥）。

このように曾祖父は二十九歳、祖父も早逝していることが分かった。この異常状態から考えられることは、父方の家系は父親のみが例外的存在であり、何らかの遺伝的な疾病素因を持った家族である可能性が高いということである。それが如何なる遺伝なのかは商隠の病状の検討を踏まえて行う。

2、病状の記述

商隠の残した詩文には、彼自身の体調が優れないとの記述は以下のように見られるが、具体的症状についての記述は殆ど見られない。

天涯常病意（「西溪」）、

我為分行近翠翹 楚雨含情皆有托 漳濱卧病竟無憐（「梓州罷吟寄同舍」）

豈是驚離鬢 應來洗病容（「九月於東逢雪」）

薄宦仍多病 從知竟遠遊（「寓興」）

多病欣依有道邦 南塘晏起想秋江（「水齋」）

中乾欲病瘠（「送從翁東從東川弘農尚書幕」） 左傳外強中乾韻會瘠渴疾相如瘠渴通作消

可憐漳浦卧 愁緒獨如麻（「病中聞河東公樂營置酒口占寄上」）

如人當一身 有左無右邊 筋體半痿痺 肘腋生臊臄…瘡疽幾十載 不敢抉其根

國蹙賦更重 人稀役彌繁 近年牛醫兒 城社更扳緣 盲目把大旆（「行次西郊作一百韻」）

嗟余久抱臨^{きょう}邛渴（「令狐八拾遺見招送裴十四歸華州」）
 移疾就猪肝 鬢入新年白 顏無舊日丹（「大鹵平後移家到永樂居書懷十韻寄劉韋
 二前輩二公嘗於此居寄居」）
 命斷湘南病渴人（「寄成都高苗二從事」）
 尚憐秦瘁苦 不遣楚醪沈（「自桂州奉使江陵途中感懷寄獻尚書」）
 顛顛欲四十 無肉畏蚤虱（「驕兒詩」）
 玉骨瘦來無一把（「偶成轉韻七十二句贈四同舍」）
 秋霖腹疾俱難遣（「王十二兄與畏之員外相訪見招小飲時余以悼亡日近不去因寄」）
 肯念沈痾士 俱期倒載還（「南潭上亭讌集以疾後至因而抒情」）
 薄宦頻移疾（「有懷在蒙飛卿」）
 恨久欲難收…辭疾索誰憂 更替林鷄恨（「即目」）
 病來唯夢此中行 相如未是真消渴（「病中早訪招國李十將軍遇挈家遊曲江」）
 茲辰聊屬疾…多情真命薄 容易即迴腸（「屬疾」）
 五更鐘後更迴腸 三年苦霧巴江水 不為離人照屋梁（「初起」）
 左川歸客自迴腸（「留贈畏之」）
 久留金勒為迴腸（「酬崔八早梅有贈兼示之作」）
 卜夜容衰鬢（「夜飲」）
 迴腸九一作久非迴後 猶有剩迴腸（「和張秀才落花有感」）
 不知瘦骨類氷井 更許夜簾通曉霜（「李夫人三首」）

3、「瘦骨」「迴腸」について

「瘦骨」「迴腸」は説明がある。まず「瘦骨」についてだが、「不知瘦骨類氷井 更許夜簾通曉霜」の意味は次のように考えられている（7）。

病氣ばかりの身体が、氷井のように冷えたのも気づかず、夜通し亡き妻を想い続けて、簾の間から夜明けの霜が入って来るままにしていた。

次に医書ではこの用語をどのように用いているか検討した。

『諸病源候論』（610、巢元方）巻二十四骨注候の説明の中に見られる。

注は住なり。…凡そ人の血氣虚なれば風邪が傷する所と為り、…人を令て血氣減耗させ、肌肉消盡し、骨髓間は時に喩喩として熱し、或いは澌澌として汗し、柴瘦骨立せしむ。故に之を骨注と謂う。

また『備急千金要方』（孫思邈、655年頃）巻十一小兒魘方には、

兒を令て羸瘦骨立し髮落ち壯熱するは是れ其の證なり。

『普濟方』（明・朱橚等撰、1406）巻三百十六中風偏枯にも、

半身不遂し肌肉枯れ瘦骨間疼痛す。
というように医書には用いられている。

次に「廻腸」の意味は辞書では、①心が安定しないさま、②人の心を感動させる、とある。医書では解剖上の名前としてのみ使用されており、こういった心理の言葉としての用例は見られない。例えば『外台秘要方』（王燾、753頃）下焦熱方六首には、
《刪繁》論じて曰く：下焦は瀆とくの如し（瀆とは、溝水の如く決泄なり）。胃の下管に起こり、廻腸を別し、膀胱に注いで滲入する。
と有る如くである。

4、消渴の病について

さて本題に戻るが、以上の用例の中で遺伝的素因の存在も考慮すると、もっとも興味深いのは「消渴」である。関連する記述を再掲すると以下の通りである。

中乾欲病瘖（「送從翁從東川弘農尚書幕」）

嗟余久抱臨邛渴（「令狐八拾遺見招送裴十四歸華州」）

病來唯夢此中行 相如未是真消渴（「病中早訪招國李十將軍遇挈家遊曲江」）

侍臣最有相如渴 不賜金莖露一杯（「漢宮詞」）

「瘖」は『説文解字』（後漢・許慎著、部首別の最初の字書、略して『説文』）では「頭痛」の意で、また『周礼』天官疾医では「首疾」の意味で用いられているが、ここでは『李義山詩集注卷三下』の注に「左傳外強中乾韻會瘖渴疾、相如瘖渴通作消」とある如く、「消渴」の意味で用いられている。漢代の司馬相如が消渴であったことが知られているが、彼の病は自分に比べれば本物ではないとまで商隱は云っている。李商隱が司馬相如を引き合いに出し消渴を詠うのは、本来の病としてではなく「渴望」の隱喩であるとの説（8）が有る。そういう面を完全否定することは出来ないが、家族歴を考えてもやはり本来の糖尿病であったと考えるべきでは無かろうか。多分相如もそうだと思うのだが、通常の食習慣の不摂生に基因するⅡ型糖尿病に比し、李商隱の遺伝が関わる糖尿病は若年発症でもあり、ずっと重症化しやすかったと考えられる。四〇代ころより親しくなったと言われる「温・李」と併称された温庭筠の詩集に次の句が見られる。

子虛何處堪消渴（「秋日旅舍寄義山李侍御」）

彼の消渴の病に関しては広く知られる所だったのであろう。

消渴に関しては、例えば『諸病源候論』（610、巢元方）消渴候には「夫れ消渴なる者は、渴止まらず小便多し是なり」と症状を記し、更に『備急千金要方』を引いて「凡そ飲酒すること積久なれば、消渴病に成らざる者有ること無し。」と飲酒がその病因と

して重要であると記している。これは明らかに糖尿病を思わせる記述である。

またしばしば司馬相如を引き合いに出すが、相如の消渴は卓文君との色事と不可分であるという認識が六朝期には出来上がっていたという指摘 (9) が有るが、これは『外台秘要方』巻十一消渴方一十七首に

其の慎しむ所の者に三有り。一に飲酒、二に房室、三に鹹食及び麪，能く此を慎しむ者は、服薬せずと雖も、自ずから可とす。

とあることから、当時の認識として誤ってはいなかったと云えよう。但し糖尿病になれば神経・血管障害などにより勃起不全になりがちなので、必ずしも房事過多にはならないかもしれないが。

家族歴などから考えられることは、商隱の場合は、特定の遺伝子の機能異常によって二十代に発症する「若年発症成人型糖尿病」に、飲酒など食習慣の誤りに基因する「Ⅱ型糖尿病」の要因が重なり一層病状の進行を早めた可能性が示唆される。ただ曾祖父や祖父に比べ、また父親が比較的長命であったことを考えれば、遺伝的素因の影響は徐々に少なくなっており、むしろ悪化の要因としては飲酒を初めとする飲食の不摂生やストレスが重視されるべきであろう。

穀類・果実などを原料とする醸造酒は『尚書』に「若作酒醴爾惟麴蘖傳酒醴湏麴蘖」と有る如く、古代より醸されていたようであるが、白酒などの蒸留酒の製造は唐代以降であり、本格的に作られるようになったのは宋代以降である (10)。従って李商隱も飲酒は黄酒などの醸造酒が主であったと考えられ、それは服用により急激な血糖値の上昇を見ることから、膵臓からのインシュリン分泌を促す。この病態を慢性的に繰り返すことにより消渴(糖尿病)を悪化させる。

寒暄不道醉如泥。(「留贈畏之」)

仍有醉如泥。(「昭州」)

晚醉題詩贈物華，罷吟還醉忘歸家。(「縣中惱飲席」)

小亭閑眠微醉消(「偶題二首」の第一首)

我雖不能飲，君時醉如泥。(「戲題樞言草閣三十二韻」)

このように商隱は酒に弱く (11) 泥酔することもあったようだが、基礎疾患として糖尿病を考えれば、飲酒により急激に血糖値が上昇し糖尿病に伴う症状が悪化する可能性が高いことを配慮すれば、二日酔いのように見えたとしても、実際にはより重篤な病態になっており、その繰り返しが寿命を縮めていたことであろうことは十分想像される。

糖尿病は死に至る糖尿病性腎症や脳梗塞、心疾患を始め種々の二次病態を引き起こすことが知られており、四十七歳の時、鄭州に帰郷後まもなく死亡していることから、

徐々に進行していた腎不全・心不全の存在、或いは急激に発症した脳卒中といった病態が死因であった可能性が示唆される。

5、眼症状について

糖尿病の二次障害の一つが失明に到る可能性がある眼疾患（糖尿病性網膜症など）である。唯一と云って良いほど珍しく具体的病状を記してあるのが視力障害についてである。眼症状に関する記述として、

不見姮一作常娥影 清秋守月輪 月中閑杵臼（「房君珊瑚散」）

刮膜想金篋涅槃經有盲人詣良醫醫即以金篋刮其眼膜（「和孫朴韋蟾孔雀詠」）

裏入珊瑚腮俗顯字○江總詩盈盈扇掩珊瑚脣（「戲題樞言草閣三十二韻」）

が見られる。ここに見られる「珊瑚散」については『太平聖惠方』（王懷隱ら、992）巻第三十二眼論が初出のようである。

眼が赤く痛み、後に膚翳を生じ、遠視が明らかならず、癢澀するを治するには、珊瑚散方を點ずるが宜し。

珊瑚（三分） 龍腦（半錢） 朱砂（一分）

上の件の薬を、先ず珊瑚と朱砂を研ぎ粉の如くし、次に龍腦を入れ、更に研ぎ勻しくならしめ、毎回銅箸を以て一米許りを取り、日に三四度之を點ず。

ちなみに珊瑚の薬効に関しては、『千金翼方』（唐・孫思邈、681年脱稿）に次のように見られ、唐代には既に霧視に有効であることが知られていたようである。

珊瑚：味甘く、平、無毒。宿血を主り、目中翳を去る。鼻衄には、末を鼻中に吹く。南海に生ず。

6、「瘴」と「瘡」の記録

中国は古代よりたびたび伝染性疾患（つまり広義の傷寒）の大流行に見舞われてきた。「疫」とか「瘡」「瘴癘」の語はこの意味で使われていた。隋代には江南の土地は陰湿であり瘴癘に苦しみ夭折する民が多かったという。李商隱は三十六歳の時、鄭垂に随い桂林に赴いている。江南の地の疫病について下のように記している。

瘴氣籠飛遠（「和孫朴韋蟾孔雀詠」）

為戀巴江暖 無辭瘴霧蒸（「北禽」）

鬼瘴朝朝避…虎箭侵膚毒（「異俗二首」）

幾夜瘴花開木棉 桂宮流影光難取（「右春」）

彼が生きていた時代の気候を調べてみた（12）。それによると紀元816年から830年の間は比較的湿潤であったが、831年から850年の間は乾燥し、その後874年までは再び

湿潤であったという。桂林に赴いた三十六歳は 847 年であり乾燥時期であったことが分かり、比較的高温多湿の悪影響は少なかったと考えられる。

7, まとめ

- 1) 李商隱の両親の死亡年齢をそれぞれ六十歳頃、七十歳を越えていたと推定し、親から与えられる直接的な腎精の不足は少なく、「先天の本」は充分にあったと考えた。
- 2) ところが曾祖父は二十九歳で死亡、祖父も早逝、次姉である斐氏姉は二十歳で死亡と、何らかの家族性遺伝的素因の存在が示唆される状況を指摘した。
- 3) 商隱の残した詩文には、彼自身の体調が優れないとの記述はいくつか見られるが、具体的症状についての記述は殆ど見られない。
- 4) 比較的稀な用語として「瘦骨」「廻腸」について説明した。
- 5) 問題となる家族性遺伝的素因として「消渴」、つまり糖尿病を考え解説した。ただその悪化の要因としては、醸造酒の飲酒などの飲食の不摂生、さらにストレスを重視すべきと考えた。
- 6) 四十七歳の時に帰郷後まもなく死亡していることから、腎不全・心不全或いは脳卒中といった糖尿病による重篤な二次病態が死因である可能性を指摘した。
- 7) 唯一具体的病状を記してある視力障害について取り上げ、治法としての珊瑚散を検討した。
- 8) 伝染性疾患の意味で使われていた「瘡」と「瘡」について検討した。

【文献】

- 1, 高橋和巳：詩人の運命（高橋和巳作品集別巻 1） p.287、河出書房新社、1972、東京
- 2, 劉学鍇：李商隱伝論（上） pp. 23-29、安徽大学出版社、2002、合肥市
- 3, 文献 2 と同じ。 p.33
- 4, 文献 2 と同じ。 pp.197-201
- 5, 文献 2 と同じ。 pp.20-23。
- 6, 劉学鍇、余恕誠著：李商隱文編年校注（第二冊） pp.790-791
- 7, 桐島薫子：晚唐詩人考 pp.159-160、中国書店、1998、福岡市
- 8, 詹滿江：李商隱研究 pp.293-318、汲古書院、平成十七年、東京
- 9, 鎌田出：司馬相如の病、中国詩文論叢、第十集 pp.144-158、1991
- 10, 程爵棠：中国薬酒配方大全 pp.1-5、人民軍医出版社、1997、北京

11, 加古理一郎：李商隱の転機、中国文化 58:67-78,2000

12, 王邨編著：中原地区歴史旱澇気候研究和予測 p.75 & p.113、気象出版社、1992、
鄭州市